
さヨナラ

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さヨナラ

【Nコード】

N1520H

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

高校生、志乃の周りで起きた、悲しく、残酷な物語。

（前書き）

微グ口注意。

「ねえ、どうしたの？」

俺の幼馴染、片桐紀乃かたぎりきのが、親しげに話しかけてきた。

「何でもねえよ。」

俺は怒鳴りつけたいのを必死に抑え、そう言った。

なんで、そんなに馴れ馴れしいんだよ。ただ、ずっと同じクラスだっただけじゃねえか。

「…ずいぶん苦しそうだよ？」

心底、心配そうに、紀乃は言う。

「なんでもねえって言っただろ！」

俺が怒鳴りつけると、一瞬、紀乃はビクつとなつて、

「…そう。なにかあったら、言ってね。私は、私だけは志乃しのの味方だから。」

取り繕うように、そう言った。

紀乃は友達に呼ばれ、どこかへ行った。

教室の自分席に座ると、ただひたすら、恐怖が襲う。

(…ああ…学校が終わる…家に、帰らなきゃいけない…)

俺は昔から、学校が好きだった。勉強も、好きだ。

だから、家に帰りたくない？

…違う。

俺は、家に、あのクソ親父のいる空間に帰るのが、恐いのだ。

学校が好きなのは、疑われることなく家から離れられるから。

勉強が好きなのは、している間は全てを忘れられるから。

俺は、家に帰りたくない。なのに、ゆっくり、でも確実に帰宅帰宅の時間は迫ってきている。

ほら、喧騒の中を歩く、教師の足音が…ここからでもしっかりと、確実に聞こえる。

カツリ、カツリ、カツリ…ガラリ。

教師の姿が見えた途端、全身から、冷や汗が。寒気が。怖気が。
「では、終礼を始める。」
帰宅を告げる声とともに、俺の一日は、幸せは、終わった。

ついに、着いてしまった。

悪魔の巣窟に。

すっかりさびれた門扉を音を立てないように開き、恐る恐る、一歩を踏み出す。

木製に引き戸まで、たどりつく。

ゆっくり、引き戸にてをかける。もうすでに息は荒く、冷や汗は滝のよう。手も、震えている。

ガシャン！ドカツ！バキッ！

その音で、手の震えが一層激しくなった。

12になる、弟の裕ゆうが、あのクソ親父にいたうぶられている音。殴る、蹴る。怒鳴りつける。

ありとあらゆる方法で、俺達はなぶられる。

扉をあけるのをためらって、なんになるのだろっ。いずれは同じ目

に遭うというのに。

グシャッ！ボキッ！

…え？

な、なんだ？い、今の音？聞いたこともない、音…

まさか！

ガラッと、決死の覚悟で扉を開け、居間に走る。

そこで俺が見たものは…

「
…え？」

血　まみれ　の　親父　と

深紅に　染まった

俺の　弟。

俺はほぼ無意識に、さげんだ。

「クソ親父イイイ！！裕に何しやがったあ！」

それに答えることなく、親父は俺を手を持ったビール瓶で殴りつけ

た。

頭の奥がジン、となり、そして激痛が襲ってくる。

俺は無様に倒れた。

そこで、倒れた弟の顔が、よく見えた。

完全に光を失った、瞳。死んでいるようにしか、見えない。

「ったく、どこでそんな言葉づかい覚えてきた？女らしくしとけていつも、言ってるだろうが！」

倒れた俺を、親父は蹴りつけた。

腹に鈍く響く痛み、そして嘔吐感。

俺はその痛みを無視し、叫ぶ。

「うるせえ！俺は絶対にてめえの言いなりになんかならねえ！てめえが女らしくしろってんなら、男のように振る舞ってやる！」

親父の返事は、頭に向けての、蹴り。

ガッン！

という音と共に、世界がゆれた。

その時、最後のタガが、外れた。

ボロボロになったはずの体は思い通りに、立った。

「殺してやる……」

鞆に手を伸ばし、中から携帯していたナイフを、取り出す。

「殺してやる……！」

「なにをするつもりだ？まさか今まで育ててくれた父親を、殺すなんてことはないよな？」

「殺してやるぜ、クソ親父イイイイイ！！！」

ナイフを構え、突進する。

恐怖も、痛みも乗り越えて。

ナイフは、驚くほど簡単に、親父の心臓を突きさした。

「ねえ、どうしたの？」

俺の幼馴染、片桐紀乃が親しげに話しかけてきた。

「…何でもねえよ。」

かすかに微笑んで、俺は答えた。

「…ずいぶん、楽しそうだよ？」

「…なんでもないって、言ってるだろ？」

今度も微笑んで、俺は答えた。

「そう。何かあったら言ってね。私は、志乃の味方だから。」

「…ありがとな。」

俺はやさしく、そう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1520h/>

さヨナら

2011年1月26日05時32分発行